

## 沖森卓也先生のご退職にあたって

加藤 陸

沖森卓也先生は、二〇一八年三月をもって立教大学文学部を退職され、その後、本学の名誉教授に就任された。沖森さんに最初にお目にかかったのは、一九九二年四月に私が立教の「日文」に赴任した時のことである。当時沖森さんは四十歳の少し手前だったが、すでに立教でのキャリアは八年目を迎えておられた。日文にはその少し前まで、前田愛、松崎仁、小田切進、井上宗雄などの偉大な研究者が長らく活躍なさっていたので―その当時のことはしばしば「あの大先生時代」として回顧された―、その先生がたの中では抜群に若い教員でいらしたわけである。沖森さんは、その後もずっと、年下の私がいいうのもおかしいが、「若々しい」印象を保ち続けておられ、先般定年を迎えられたということが、今でもなかなか実感できない。

沖森さんは、とてもお酒が強く、私に来る前は、石崎等、渡辺憲司といった年長の先生がたと、酒席を共にされるが多かったようで、そこに新参者の私に加わるようになった。毎回の宴はそれはそれは楽しく、たまに仏教研究者の横山絃一先生が加わったりすると、話題から何からめちゃくちゃになった。今となつてはかけがえのない思い出である。沖森さんは、池袋のどこにどんな店があるか、メニュー、料金体系も含めてよくご存じで、特にその店が利益率に目をつぶって供しているおいしい料理を、きちんと把握されていた。たとえば、立教通りに存在した養老の滝に寄った時など、「ここではまず焼いた海老を注文すべし」というように指南があり、実際にそれは安くておいしいのであった。

沖森さんのものの考え方、行動の仕方からは、しばしば「合理的的精神」と言えるようなものが感じ取られる。酒席の話でいえば、意味のないものには支出したくない、注文するならおいしくかつ安いものを、という考え方。そういう姿勢は、何より大学における仕事でよく感じとれた。入試業務でも学科内の仕事（雑用）でも、沖森さんは仕事万端を実に手際よくこなされていたが、なかでも教務の仕事、すなわち次年度のカリキュラムにおける

教員配置、兼任講師の配分などは、ご自身が教務委員にあたっていようがいまいが、ずっと沖森さんの仕事だった。きつと、ややこしい仕事を人に任せるよりは、さっさと自分で片づけたほうが早くて楽というお考えがあったのであろう。文学部長の大任を務められた際にも、大量の仕事を最短距離でやすやすとこなされていたように見受けられた。

沖森さんから感じられる合理的精神は、決して無駄を避けるということだけに集約されるものではない。大学のカリキュラムに日本語学の科目数が限られていて、沖森ゼミの留学生たちが苦勞しているのを見て、科目を増設して実質ボランティアで毎年担当されていたことなども、現実存在する問題を、予算がつかない条件の中で、とにかく解決しようと思われたのだと思う。院生の研究成果の公表のために、自力で『立教大学日本語研究』を立ち上げ、刊行を継続なされたことも、必要とあらば労力をいとわない沖森さんならではのお仕事だった。総じて留学生教育で沖森さんが果たされた役割はまことに偉大で、海外から迎えた多くの学生に博士の学位を与えて、母国や日本での活躍につなげた功績は、なかなか真似できないことである。その留学生の論文指導でも、限られた年限で、どのようにすれば学位が獲得できるかについて、留学生一人ひとりに対して、慎重なテーマ選定と最短距離をいく指導計画が遂行されていたことは特筆すべきであろう。

沖森さんは、純粹な学術書とは別に、テキストや辞書など広く読まれる図書も多く公刊されている。そこには、せっかくだ出するなら有用なものをという、合理的精神が見て取れる。そこから、『ベネッセ表現読解国語辞典』『日本辞書辞典』のようなユニークな書物が生まれたのであろう。

いつのまにか、沖森さんも日本語学の領域で「大先生」と呼ばれる存在となつていく。その研究者としての、また教育者としてのキャリアにとって、立教の定年は一里塚にすぎないだろう。いつまでも若々しくてきばきとお仕事なさるお姿を、これからも拝見できるものと期待する。